



## 馬耳東風

10年前のこと、鎌倉の鶴岡八幡宮のご神木「大銀杏」が、台風並みの強風と水分の多い雪に耐えられず、ついに倒壊したというニュースが駆け巡った。寿命を迎えたかに思われたが、切断して幹の根を殺菌処理して植え直し根付くのを目指すというものだった。さらに、残っている土中の根から新芽の発芽処理をするとのこと。朱塗りの柵を注連縄で囲い、再生の祈りを捧げながらの努力の甲斐あって、根元からの「ひこばえ」の成長と幹からの発芽が順調で、秋には色づきの情報もあった。長寿と縁起の良い木で誰もが再生を願っているが、それにしても推定千年の寿命を繋いだと言う。高さ30m、幹周り7mもあり、中は空洞になっている神ノ木の存在は、伝説を伝えるに十分である。権力闘争に明け暮れた源氏ゆかりの地のシンボルである。修学旅行のメッカで、銀杏の大樹の脇の階段に並んだ記念写真を思い出す方も多はずだ。身内をも犠牲にして権力を維持した源頼朝の謀殺とその子源実朝の暗殺の歴史伝説は悲しいものだ。

埼玉県狭山市の国道16号の入間川沿いに木曾清水冠者義高を祭った清水八幡宮(元暦元年(1184)創建)がある。木曾義仲の長男で人質として頼朝と北条政子の長女・大姫の婿という名目で鎌倉へ下った。父の義仲は京を治めることに失敗、義高も追討の身となり、女房姿で馬の蹄に綿を巻いて音を伏せて鎌倉を脱出したが、武州入間川の辺で頼朝の追討軍に討たれた。妻の大姫は悲嘆にくれ病床に伏し、日を追ってやつれた。母政子は頼朝に迫

り、討ち取った郎党を晒し首にした。しかし、大姫は夫義高を偲んで十余年も床に伏したまま政子を悲しませた。政子は追善供養や読経、各寺院への祈祷などあらゆる手を尽くしたが効果はなかった。狭山市八幡神社の別当・成門寺の銀杏は、北条政子がかかわった苗が成長して巨木になったと伝えられる。寺は明治の神仏分離で廃寺になったが銀杏は残り、樹高25m目通り幹囲5.3m(環境省 巨樹・巨木林データベース、2000年フォローアップ調査)に成長した。狭山市駅前の開発で移転を迫られていたが、あまりにも大樹過ぎて引き取り手が見つからなかった。幹は人が入れる空洞をなし、戦後の混乱期に洞内で火を燃やしたといわれ、煤けた痕跡が明らかで、移植に強いと言いながらも樹勢への影響を考えると予断を許さないように思われた。しかし、開発による伐採を惜しんだ八幡神社に縁の篤志家が専門家と相談、2014年の再開発の折に移植に可能な仕立てを用意周到に行い、根回りを掘削して弧で包んだ。クレーン車で2km以上離れた移転先へ慎重に搬送した。移植後は根元を堅固に保護し、発根を見守った。根幹の中央部から空洞を通して空が見え、5年後には枝葉が立派に付いて回復した。秋は見事に黄葉し落ち葉が一面を敷き詰めた。幹は乳を垂れるが銀杏は付けないうだ。幼稚園児の格好の遊び場として歓声に囲まれながら、馬・山羊・羊の開放的な飼育環境に良く適応して保全されている。見事な移植技術とそれを実現した篤志家の温かい思いは、鎌倉悲劇の伝承をなごませ、今を強く生きることを教えているようだ。(柏)